

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 20 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520766

研究課題名(和文) アウターサークル英語との接触が日本人の英語学習に与える教育効果の検証

研究課題名(英文) Pedagogical Effects of Outer Circle Englishes on Japanese Learners of English

研究代表者

吉川 寛 (YOSHIKAWA, Hiroshi)

中京大学・国際英語学部・教授

研究者番号：90301639

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ESL圏への留学を通してOuter Circle英語との接触が日本人の英語学習にどんな教育効果を齎すかの解明であった。研究成果は、Outer Circle英語との接触後における(1)学習者のOuter Circle英語や日本人英語の自律性への認識を確認しえたこと、(2)acrolectの汎用性への理解の深化を確認し得たこと、(3)Outer Circleへの研修後、非母語話者英語を学習モデルとすることへの学習者の認識の変化を確認できたこと、(4)英語表出における情意能力の強化の確認、(5)Outer Circle圏への留学効果に関する諸要因の判明が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：The present study aimed to elucidate pedagogical effects of Outer Circle Englishes on Japanese learners of English. The research results are: (1)Japanese students of English showed tendency to accept autonomous and norm-developing features of Outer Circle Englishes (and Japanese English) after they had study experience in Singapore and faced indigenization of English, (2)They also showed deeper understanding of importance of acrolect varieties of non-native Englishes in terms of international intelligibility, (3)Study experience in an Outer Circle country helped to increase learners' acceptance of non-native Englishes as learning models, (4)Contact with an Outer Circle English and experience of speaking English with non-native speakers of English helped to raise Japanese learners' affective competence in English communication, (5)Several factors were also founded to be connected to successful study in Outer Circle countries.

研究分野：社会言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：国際英語論 アウターサークル英語 英語教育 日本人英語

1. 研究開始当初の背景

国際英語論は、現在の英語が、英米を中心とする母語話者英語圏 (Inner Circle) の地域言語としての役割を超えて、多くの Outer Circle 地域での国内共通語として、また、Expanding Circle 地域を含めた国際的な共通語として、飛躍的にその重要度を増している現状をどう受け止めるべきか、また、将来的な国際英語のあり方をどう方向づけるか、という関心のもとに 1980 年代から活発化してきた社会言語学的研究分野である。非英語母語話者の数が英語母語話者を遥かに凌ぐ状況の中で、母語話者英語偏重主義の見直しを提案した David Crystal, Braj Kachru, Larry Smith などによる先行研究は、数々の ESL・EFL 変種に関する実態研究や、英語と identity の関係を扱う研究、Jennifer Jenkins の lingua franca core に見られる国際共通語としての英語モデルの構築をめざす研究 (Jenkins 2003)、また、英語変種間の international intelligibility に関する研究 (Smith 1992) などへと発展した。さらに、母語話者か否か (nativity)、社会制度化 (institutionalized) された位置づけを持つか否かを分類基準にするのではなく、international intelligibility と locality を基準とする、より機能的で柔軟な英語区分の提案などもなされている (Tom McArthur 2002, Jan Svartvik & Geoffrey Leech 2006)。また、日本人研究者の間では、国際英語論の視点から「日本人英語」を多面的に研究する必要性が強調されてきている (本名・竹下 2003, Honna 2008)。

日本の英語教育における学習教材の約 8 割が米語モデルに基づくと言われる中で、日本人に適した独自の英語モデルの必要性を指摘する研究もあり (Hinno 2009a, 2009b)、発信型技能 (話す・書く) の到達目標には日本人の感性や認知的特徴を反映することが自然であり、受信型技能 (聴く・読む) の学習モデルとしては Inner・Outer・Expanding Circle の区別を問わず多様な変種を取り入れるべきだという見解が本研究の理論的前提となっている (吉川 2010)。米語などの母語話者英語モデルが現実的に圧倒的な勢いを得ている一方で、New Englishes に触れることや、それらを学習モデルとすることが日本人英語学習者の認識や態度にどのような影響を与えうるか、また発信型技能や受信型技能の育成にどのような学習効果を与えうる可能性が模索され始めている。

2. 研究の目的

英語使用が世界的規模で拡大し、国際共通語化が顕著となる中で、従来の母語話者英語偏重の姿勢を見直し、非母語話者英語の重要性を同等に評価しようとする「国際英語論」への注目が高まっている。しかし、日本の英語教育における学習モデルは未だ英米変種に偏っており、学習教材では約 8 割が米語モ

デルに基づくと言われている。近年、日本人に適した独自の英語モデルの必要性を指摘する研究もなされ、発信型技能 (話す・書く) の到達目標には日本人の感性や認知的特徴を反映することが自然であり、受信型技能 (聴く・読む) の学習モデルとしては Inner・Outer・Expanding Circle の区別を問わず多様な変種を取り入れるべきだという提案もなされている。本研究は、Outer Circle 英語に注目し、英語学習時に、教材や教師の選択や留学体験などを通して、Outer Circle 英語と接触しそれを学習モデルとすることで日本人の英語学習やコミュニケーション能力に与える教育効果を調査・検証することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、前提的研究と主要研究を並行して実施した。

・前提的研究

(1) 国際英語論における Outer Circle 英語と Expanding Circle 英語の関係性の分析と整理

(2) Outer Circle 英語の音韻・語彙・統語上の諸特徴の整理

これらの研究テーマは本研究グループがこれまでに積み重ねてきた研究テーマであり、以下の主要研究の理論的ベースになるものとして継続された。

・主要研究

(1) Outer Circle 英語を英語教育に導入する方法についての具体案の提示

(2) Outer Circle 英語の導入に適した日本人学習者の英語習熟レベルの考察

(3) Outer Circle 英語に対する日本人英語学習者の一般的認識と国内において Outer Circle 英語と接触した日本人学習者の英語認識について比較調査

(4) Inner Circle 諸国への留学者と Outer Circle 諸国への留学者を対象に、英語認識・英語技能・コミュニケーション能力、獲得した英語の特徴などの比較調査

(5) Outer Circle 英語との接触が日本人の英語習得やコミュニケーション能力に与える教育効果についての調査結果

(6) 米国・英国への留学生とそれ以外の Inner Circle 諸国に留学した学生の英語認識における相違などについても調査

これらの研究テーマに関して、シンガポールで英語学習を行った EFL 地域の英語学習者、オーストラリアで英語学習を経験した日本人学習者、国内だけで英語を学習した日本人英語学習者の 3 グループへアンケート調査と聞き取り調査を行い、比較分析を行った。

4. 研究成果

本研究では Outer Circle 英語を英語教育に導入する具体的方法を提示するとともに学習者の習熟レベルによる相違についても検討した。

「Outer Circle 英語との接触が与える教育効果」に関する主な研究成果としては、(1) Outer Circle 英語と日本人英語の自律性に関する学習者の認識が確認できたこと、(2) acrolect としての英語変種の汎用性への理解の深化を確認し得たこと、(3) Outer Circle への研修後、非母語話者英語を学習モデルとすることへの学習者の認識の変化を確認できたこと、(4) 英語表出における情意能力の強化が見られたこと、(5) Outer Circle 圏への留学効果に関係する諸要因が判明したことが挙げられる

(1) Outer Circle 英語や日本人英語の自律性に関する学習者の肯定的認識が確認できた。

シンガポールで語学研修を受けた日本人を含むアジア人 EFL 学習者は、Outer Circle 英語との接触を 79.7% が「望ましい」と受け取っている。また、「英語は英米文化とは独立した国際語である」という項目への賛同は 80% を超えた。これは、Outer Circle への留学・研修が研修先への親近感を高め、Outer Circle 英語の自律性に関する肯定的認識を高める効果をもつことを示していると思われる。

シンガポールの現地語や文化を尊重する姿勢において、シンガポール研修者の認識に変化が見られた。

「英語使用時には英米人のジェスチャーを使用すべきだ」との設問にシンガポール研修者以外が高い賛成を示したのに対し、シンガポール研修者はその必要を認めないという点で、統計上有意な差異がみられた。これは、Outer Circle での研修者に、Outer Circle の言語的文化的自律性を受容する態度が増加することを間接的に示すものであると考えられる。

(2) acrolect としての英語変種の汎用性への理解が高められた。

シンガポールでの日本人英語学習者は、acrolect、mesolect、basilect の 3 種のシンガポール英語の多様性を体験する。学習者に対してのアンケート調査からは、basilect に対して低い評価を与え、acrolect の高い汎用性を強く認識するという結果が見られた。このことから、ひいては acrolect としての日本人英語への評価を導き出し、学習目標を acrolect としての日本人英語 (educated Japanese English) に自ら設定する気を喚起するようになることに繋がることが期待できる。

(3) 非母語話者英語モデルへの受容的態度における変化が確認しえた。

シンガポールでの英語研修経験者は「日本人英語教師による指導を望むか」との設問に対する肯定的回答が研修前と比較して大きく増加した。これは日本人英語教師による「acrolect としての日本人英語」を学習モデル

として受容する意識が高まったことを示すものと思われる。

(4) 英語表出における情意能力の強化が見られた。

日本人が外国人と英語で会話する際の心理状態の調査により、Inner Circle の英語話者と会話する際にほとんどの日本人が緊張感を自覚するのに対し、Outer Circle の英語話者との会話時には緊張感を持たない、あるいはかなり低くなるという結果が得られた。これは Outer Circle 英語との接触が英語表出における日本人学習者の情意能力 (affective competence) の強化につながりうる可能性を示している。

(5) Outer Circle 圏への留学効果に関係する諸要因が判明した

Outer Circle 英語に関心を示し受容するのは比較的英語力の高い日本人英語学習者であることが調査より確認された。これは、留学前のある程度英語の習熟度を高めておくことが Outer Circle 圏への留学においても効果的であることを示している。

留学期間の長さも Outer Circle 英語への認識に影響を与えており、Outer Circle 英語との接触期間が 3 週間であった大学生群と 4 ヶ月であった大学生群との比較において、後者の方が Outer Circle 英語への受容に積極性が見られることが判明した。これは学習者の意識形成において、より長期の留学期間の設定が必要であることを示唆する結果となっている。

(6) Outer Circle 英語との接触の意義

比較のため、Inner Circle での研修者を対象にアンケート調査を行った結果、Inner Circle での研修・留学を行った日本人学習者は、英語母語話者英語や英米人英語教師への憧憬が強化されることが判明した。このことは、日本人学習者にとって Inner Circle の英語一辺倒ではなく Outer Circle の英語や非英語圏の英語教師と接触することが日本人英語話者としての「自分の英語」の認識を高める上で意味を持つことを逆説的に示している事実であると思われた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 10 件)

小宮富子 「日本語と日本人の英語」『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて』査読無、2014、pp.58-68

塩澤正 「国際英語論」の視点に立った英語教育とは—具体的目標と留意点—『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて』査読無、2014、pp.163-174

倉橋洋子 「日本人が英語を話す時の心

理的障害—他の Expanding Circle と比較して」 『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて』 査読無、2014、pp.153-162

下内 充 「連結詞から見る日英語の文構造と英語の基本文型」 『現代社会と英語—英語の多様性をみつめて』 査読無、2014、pp.275-286

吉川 寛 「様々な英語たち」 『英語教育 6月号』 査読無、2013、pp.54-55

吉川 寛 「EILとしての英語習得/教育におけるレトリックへの対応—慣用表現に焦点を当てて—」 『JACET 中部支部紀要 第11号』 査読有、2013、pp.56 - 61

塩澤 正 「英語教師に勧める「異文化理解」に関する本」 『英語教育 9月号』 査読無、2012、pp. 30-31、大修館書店。

吉川 寛、小宮富子、塩澤 正、倉橋洋子、下内 充 「英語多変種との接触が学習者の英語観に与える影響—Outer Circle 英語に焦点を当てて—」 『JACET 中部支部紀要 第10号』 査読有、2012、pp. 55-80

小宮富子・本名信行・井出祥子・吉川寛、「英語教育と社会言語学—日本人が英語を学ぶということ」、Proceedings of the JACET 51st International Convention、査読有、2巻、2012、pp28-35

倉橋洋子 “The Use of English Loanwords in the Japanese language: A Study on Learning English Vocabulary from English Loanwords” 『JACET 中部支部紀要 第9号』 査読有、2011、pp.109 - 123

〔学会発表〕(計 11 件)

小宮富子 ‘Japanese English from an EIL perspective’, The 1st International Conference of English Scholars Beyond Borders , 2014年3月22日、Dokuz Eylul University (in Turkey)

倉橋洋子 「日本人が英語を話す時の心理的障害」 JACET 定例研究会、2013年12月21日、中京大学

塩澤 正 「国際英語論の考え方を反映した英語教育とは—情意レベルを刺激する肯定的体験学習のすすめ—」 JACET 定例研究会、2013年12月21日、中京大学

吉川 寛 “New Direction of World Englishes Education: New Subjects in the new WE’s Career Major - in reference to the concept of Wes” 日本「アジア英語」学会全国大会、2013年12月7日、中京大学

吉川 寛 「EILとしての英語習得/教育におけるレトリックへの対応」 大学英語教育学会中部支部大会 2013年6月1日、岐阜聖徳学園大学

小宮富子 「社会言語学と英語教育：日本人が英語をまなぶということ」 第51回大学教育学会国際大会、2012年9月1日、愛知県立大学

吉川 寛 「国際英語論と日本における大学英語教育」 第51回大学教育学会国際

大会、2012年9月1日、愛知県立大学
吉川 寛 「国際言語管理と国際英語論」 JACET 定例研究会、2012年2月18日、中京大学

小宮富子 「非母語話者英語への英語学習者の認識と日本人英語」 JACET 定例研究会、2012年2月18日、中京大学

吉川 寛 「国際言語としての英語」 第3回国際言語管理研究会 2011年12月17日、青山学院大学

小宮富子 「大学英語教育における理論と実践の連携」 大学英語教育学会中部支部大会 2011年6月4日、名城大学

〔図書〕(計 2 件)

塩澤 正・榎木蘭鉄也・倉橋洋子・小宮富子・下内 充 (編著) 金星堂、『現代社会と英語 - 英語の多様性をみつめて』 2014年、397頁

吉川 寛 (共著) アスク出版、『企業・大学はグローバル人材をどう育てるか』 2012年、245頁 (122-130)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 寛 (YOSHIKAWA, Hiroshi)
中京大学・国際英語学部・教授
研究者番号：90301639

(2) 研究分担者

塩澤 正 (SHIOZAWA, Tadashi)
中部大学・人文学部・教授
研究者番号：10226095

倉橋 洋子 (KURAHASHI, Yoko)
東海学園大学・経営学部・教授
研究者番号：10082372

小宮 富子 (KOMIYA, Tomiko)
岡崎女子大学・子ども教育学部・教授
研究者番号：40205513

下内 充 (SHIMOUCHI, Mitsuru)
東海学院大学・人間関係学部・教授
研究者番号：50249215